

生徒に付けたい力を起点とした授業づくりへの転換を！

## これからの社会を生きていく力を育む アクティブ・ラーニングとは？

次期学習指導要領の改訂に向けた審議が始まった。審議の主要事項の1つに挙げられているのが、アクティブ・ラーニングだ。現行課程でも、知識・技能の活用を図る活動や言語活動の充実が求められており、その方向性が推し進められると予想される。そもそもアクティブ・ラーニングとは何か。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の下に設置された教育課程企画特別部会の委員を務める、横浜国立大の高木展郎教授に話を聞いた。

### 新しい学力観に基づいた 指導が求められている

アクティブ・ラーニングとは、学習者が能動的に取り組む学習形態のことです。学習者が自分の考えを書いたり発表したり、グループで課題解決に取り組んだりといった活動が主に挙げられます。そうした活動が重視されている背景には、これからの時代に通用する新しい学力の育成が求められていることがあります。今や社会は、グローバル化や情報化が加速度的に進み、変化が激しく、予測が難しい状況になっています。

そうした社会を生きていく力を子どもたちに育むために、どのような教育活動をしていけばよいのが議論され、様々な実践がされてきました。

そうした中、2007年、学校教育法が一部改正され、学力の重要な要素として次の3つが示されました。

- ① 基礎的・基本的な知識・技能
- ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③ 主体的に学習に取り組む態度

学力とは、知識・技能のみならず、それらを活用するための思考力・判断力・表現力、そして学習を自ら進めていく態度も含まれると、初めて

定義されたのです。

これまでの授業は、教師による講義型が多かったと思います。生徒は先生の話聞き、板書をノートに書き取ることが中心で、テストでは、覚えた知識をいかに速く、正確にアウトプット出来るかが重視されてきました。そうした知識・技能の習得だけでなく、新しく学力として定義された、知識・技能を活用する様々な力や、主体的に学習する態度を育むための学習形態として、アクティブ・ラーニングが打ち出されたのです。

先生自身が受けてきた教育やこれまで行ってきた授業に基づいた学力観から脱却するのは、容易なことでは

はないでしょう。しかし、学力の定義は、時代や社会に応じて変化する

という認識を持つ必要があるとも考えられます。例えば、知らないことがあっても、今はインターネットで調べれば即座に分かります。ですから、「情報を活用する」といった力から、「情報を活用する」といった力からより必要となり、根拠に基づいて自分の意見を発信する力が重視されています。このように、社会の状況に応じて、生きていくために必要な力は変化していくのです。

ここで誤解しないでいただきたいのは、一斉授業などによる知識・技能の習得は、新しい学力に定義されている通り、今までと同じように大



横浜国立大教育人間科  
学部教授、学部長特任補  
佐（教職大学院担当）  
**高木展郎**  
たかぎ のぶお

兵庫教育大学大学院学校教育研究科  
言語系修了。専門は教育方法学、  
国語科教育学。東京都公立中学校  
教諭、神奈川県立高校教諭、筑波  
大学附属駒場中学・高校教諭、福  
井大、静岡大を経て現職。近著に  
『変わる学力、変える授業。―21世  
紀を生き抜く力とは―』（三省堂）。

切だということです。ただ、習得したものを自分で考えて捉え直し、自分のものとしてアウトプットする学習形態も、これからの社会を生き延びていく力を付けるために必要なのです。

## 他者がいるからこそ、 気付き、主体性が生まれる

アクティブ・ラーニングは、文部科学省の定義では「学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法」とされています（図1）。私は、それに「双方向性」を加え、「主体的・能動的で双方向性のある、自律的かつ協働的な学び」であると考えます。

メタ認知の意識を基盤とした主体的・自律的な学習であり、豊かなコミュニケーション活動を経た協働的な学習を含むものです。

1つめの要素は、「主体的・能動的」であることです。例えば、英語の授業で、生徒が教科書に書いてあるスキットを言い合うだけでは、活動に思考が伴っていませんから、活動が盛り上がったとしてもアクティブ・ラーニングとはいえません。スキットを活用して自分で考えた英文を言い合う活動にしてこそ、アクティブ・ラーニングになるのです。

2つめの要素は、「双方向性」であることです。生徒は必要性を感じれる

ば自ら学びに向かいますが、その必要性を自覚させるためには、他者とのかわりがあり有効です。単純な例でいうと、みんなで徒競走をすれば、自分は足が速いか遅いか明白になります。もし遅いと気付いた時、「もっと速く走りたい」「このままでよい」と思いを巡らすことでしよう。もっと速く走りたいと思えば、そのためと早く走りたいと思えば、そのためにどうすればよいのかと工夫します。他者と比較をすることによってメタ認知ができ、自分で考えて行動する態度、つまり主体性や能動性が生み出されるのです。

覚えることは1人でも出来ます。しかし、自分の思いや能力に気付き、自分を変えていくことは、相対化する他者がいなければ出来ません。他者を必要とするアクティブ・ラーニングは、集団で学ぶ学校でこそすべき学習なのです。

## 生徒に付けた力のために 有効な指導法を選ぶ

アクティブ・ラーニングをどのように取り入れればよいのか、いくつかのポイントを挙げたいと思います。

図1 文部科学省によるアクティブ・ラーニングの定義

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

\*中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」（2012年8月）中の用語集より抜粋

最も強調しておきたいのが、アクティブ・ラーニングには決まった型はないということです。アクティブ・ラーニングには様々な手法（P.48図2）がありますが、「この場面ではこういう手法がよい」といった型はありません。ましてや、全ての授業でアクティブ・ラーニングを取り入れる必要もありません。生徒に付けた力を明確にし、そのために有効な指導法を選ばなければいけません。例えば、知識・技能の習得では、従来の一斉授業が効果的な場合があるでしょう。ただ、その習得した知識を定着する

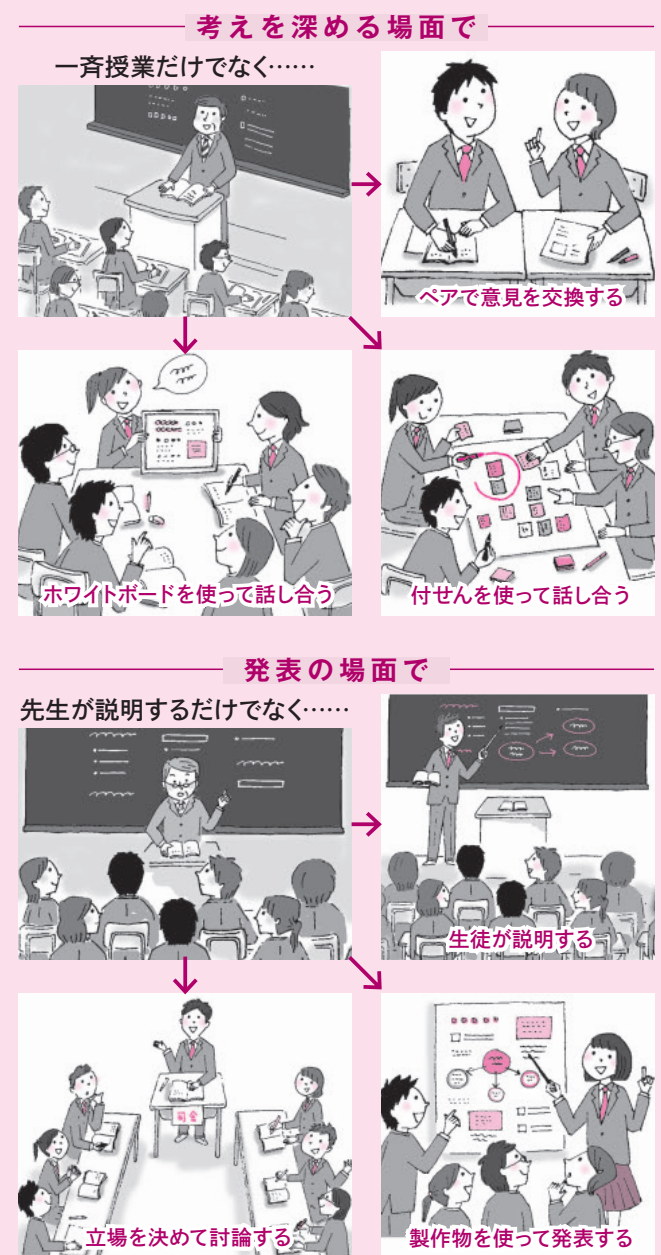
ために、1人で黙々と演習問題に取り組むのではなく、「ペアで意見を交換する」「生徒が説明する」といった活動が有効でもあるのです。

このように考えると、アクティブ・ラーニングは、普段の指導と何ら変わりがないと感じられるでしょう。確かにその通りで、これまでは無意識に行っていたアクティブ・ラーニングを、意識して授業に組み込むことによって、付けたい学力を見据えた学習をより効果的に行う。それが、アクティブ・ラーニングを実践する際に求められていることなのです。

## 自己相対化に必要な 1人で考える場と振り返り

アクティブ・ラーニングを効果的に行う1つめのポイントは、必然性のある場面で、生徒が考えたくなる問いを設定することです。例えば、2人で相談しながら答えを考え、発表するとすれば、生徒は活動に参加せざるをえません。更に、答えが複数ある問い、正解がない問いは、生徒から多様な考えが出てきて、各自の思考が深まります。

図2 アクティブ・ラーニングの充実に向けて



\*文部科学省「言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】」のイメージ例を基に編集部で作成

2つめに、1人で考える場を設けることです。自分の考えを明確にする、分かったこと・分からないことを自覚した上で他者と交流することで、自己相対化が出来るからです。

その自己相対化の場面として、3つめに挙げたいのが振り返りです。授業で学んだことを思い返し、再構成し、吟味し、自分の中で意味付けをすることで、気付きを生みます。例えば、数学では、授業の最後にその時間に学んだ公式などを活用する

演習問題に取り組むでしょう。生徒は授業を思い返しながら問題を解くはずですが、つまづいた箇所があれば、そこが理解できていないと自覚し、次の学習に結び付きます。同様に、

アクティブ・ラーニングでも、他人の意見を聞いて自分のどこが変わったのかを自覚しなければ、感想レベルで終わってしまいます。また、絶えず他を意識する自己相対化は、1人よがりにならず、社会性を身に付けるためにも重要といえるでしょう。

## 教師に求められるのは 「待つ」姿勢

ペア・ワークやグループ・ワークで、成績下位層をどう支援すればよいのかという声を聞きますが、そうした学力差の中での活動は生徒にとって学びのチャンスです。分かっている生徒には相手に教えることで自分の理解を深める機会となり、分からない生徒には教師とは違う視点での説



明を聞く機会となります。アクティブ・ラーニングは、生徒が自分で考え判断したことを、生徒同士でコミュニケーションを取りながら進める学びです。教師はつい口を出したくなりますが、そこは我慢です。私も大学の授業でグループ・ワークをする際、最後のまとめの5分間以外は話さないことを、自分のルールにしています。教師はその間、活動の様子を見取り、生徒個々の定着度をつかんで、効果的な個別指導に結び付けましょう。

もう一つ、注意したいのが評価方法です。アクティブ・ラーニングを取り入れたのに、評価は従来通りのペーパーテストのみでは、生徒もなぜこのような授業を行っているのかわ解できません。新たに導入された観点別評価の「意欲・関心・態度」「思考・判断・表現」という項目を、アクティブ・ラーニングではしっかりと評価していただきたいと思えます。

## 学校として単元計画を練り アクティブ・ラーニングを組み込む

現行の学習指導要領では学習内容が増え、授業時間数に余裕がないの

が課題であることは理解しています。だからこそ、「生徒にどのような力を付けたいか」をしっかりと考えて単元計画を練ることが必要ではないでしょうか。単元計画を生徒に提示すれば、生徒も見通しを持って学習に臨めるという利点があり、その重要性は学習指導要領にも示されています。

知識・技能の習得は重要です。ただ、新たな学力である「思考力・判断力・表現力」を付けることと、「主体的に学習に取り組む態度」を涵養することも求められています。教科書の順番どおりに並べた教育課程ではなく、自校の生徒に付けたい力から考えた教育課程を立て、一斉学習とアクティブ・ラーニングのそれぞれの良さを生かして両立を図っていただきたいと思えます。

その際に留意しなくてはいけないのは、教育課程の立案に学校全体で取り組むことです。学校で提供される教育活動が教員個々で異なってしまうと、生徒は困惑してしまいます。次期学習指導要領の検討事項には、「チーム学校」が挙げられています。学校が組織全体として学校力を高め、高めていくための学校運営のあり方、

教員と事務職員、学校外の専門家や地域との連携などが検討課題です。つまり、学校全体としての教育活動がますます問われるようになっていきます。高校の学習内容は専門性が高く、授業は個々の先生に任せられる傾向にあります。そうした体制も見直す時が来ているのです。

## 「生徒」を主語に 教育活動を組み立てていく

大学では、2012年8月、中央教育審議会の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」においてアクティブ・ラーニングの重要性が指摘され、既に国公私立を問わず、授業に取り入れられてきています。大学での学びに思考力・

判断力・表現力等が必要なことから、大学入試もそれらを測る問題に転換されつつあります。そのような大学の動きを受けて、高校でもアクティブ・ラーニングが徐々に取り入れられ始めています。元々、高校でもその重要性が指摘されていたわけですから、取り入れるきっかけが大学入試であつてもよいと思えます。ただ、

それだけを意識した活動では、いずれ形骸化することが容易に想定されます。大学入試に合格することや就職することが、教育のゴールではありません。生徒がその先にある人生をたくましく歩んでいく力を育むことが教育の目的であることを、今一度思い返していただきたいと思えます。

学校の主語は「生徒」です。教師が教えることを伝えるばかりでは、生徒は授業への意欲を持っていません。生徒は授業への意欲を持っていないのか。「生徒にどんな力を付けたいのか」を起点に指導を組み立てれば、生徒が必然性を持って学ぶ空間が出来るのではないのでしょうか。

1872年に学制が公布され、子どもが学校で学ぶという近代的教育制度が始まりました。その約70年後、1945年に太平洋戦争が終わり、現代に至るまでの教育制度が整備されました。更に70年が経ち、学校教育は再び変わろうとしています。科学技術の発展により、文明は転換期を迎えているともいわれています。そうした時代において求められる学力が今までと異なるのは自然な流れであり、それと共に教育も変わっていくべきなのだと思います。